

# 青年ミヘルス研究——1908年： 革命的サンディカリズムと エリート理論

氏 家 伸 一

## は じ め に

「君が組織について語るとき、君はオリガーキー形成の傾向について語っているのだ。」

これは、後に『政党の社会学』で有名になった文句だが、この1908年に語られたという意味でこの年は記念すべき年といえるかもしれない。

この時期のミヘルスには、様々な傾向が混在し、整合するのに苦慮させられる。啓蒙と非合理主義（残基、群集心理）、「鉄則」と過程（「傾向」）、主知主義と主意主義、議会制と直接民主主義、エリートとマス、科学と洗脳（宣伝、操作）、マスとエリートの相克が思想のダイナミズムを形成する。また、心情倫理から責任倫理への過渡期といえるかもしれない。<sup>(1)</sup>

代表制の議論についても、その評価にすこしずつ変移がすすむ。

ただ、この時期のミヘルスが、「社会学者（社会心理学、歴史学、政治社会学、社会経済学）」への志向性を強めていったことはよく知られている。ウェーバーの影響、示唆があったことは当然考えられる。<sup>(2)</sup>

しかし、彼はまだ、必ずしも、断固とした科学主義へ転向したわけではない。一方で事実の探求、他方で払拭できないイデオロギー、この両

者の間でゆれうごいている。民主主義の問題でも、ルソー流直接デモクラシーへの執着のために、彼は、(議会制)デモクラシーと称する現実過程に対して「ペシミスティック」にならざるを得ない。

このように、1908年のミヘルスは、思想展開において、輻輳した歩みを示している。

一方で、フランスのサンディカリズム大会へ参加し、講演し、それをサンディカリストの雑誌 *Le mouvement Socialiste* に発表している。他方で、「オリガーキー」と題した論文(「憲政上の有機的オリガーキー」(N. 215), 「社会のオリガーキー傾向——民主主義問題への寄与」(N. 210))を発表していた。そしてこの両面は、少なからず関連しているとの解釈もある。(後述)前者で、民主主義と社会主義の発展の可能性を、サンディカリズムの触媒で展望し、後者では、〈事実〉に基づいた学問的論証によって、そもそも民主主義が不可能であるとの認識と接触し始めていた。

ミヘルス＝ソレル流のサンデカリスト説が、一面的(無関係ではないが、還元はできない、という意味)であると同様に、ミヘルス＝エリート論者説も不十分である。よって、サンディカリストからエリート論者へ、とのミヘルス転向説も正鵠を射ているとはいえない。

後に触れるように当時のミヘルスのソレル評もそれを裏書している。

「オリガーキーの鉄則」命題の着想が、モスカとの出会いに由来することは、初めてオリガーキーの名を冠した論文が(N. 210)「国法」レヴェルでまず着手されたことから分かる。しかし、それも、ここまで。論文全60頁のうち、約半分は、組織のオリガーキー問題に割かれている。

逆にこの論文の、エリート思想の思想史的先行者の指摘がモスカに影響した模様である。

その際ミヘルスが、エリート思想の思想史的先行者として、とりわけ社会主義者とアナキストを引き合いに出したことがいっそう注目されるべきであろう。

アルベルトーニは、ミヘルスとモスカについて、二人を安易に「ひとくくり」にするには「相違」点のほうが多いとのべている。<sup>(3)</sup>

さらに、そもそもミヘルス＝エリート論なら、彼が執拗に大衆に拘泥したわけがわからない。他のエリート論者にはない、この大衆への拘泥は、ミヘルスの思想的関心から終生消え去ることはなかった。

1908年の著作は大きく三群に分類できる。

- 1) 社会主義と民主主義を論じた政治家ミヘルスの延長。(N. 211, N. 215.)
- 2) モスカの影響のもと、自分の政治的経験を整理しようとするもの。
- 3) 講義の必要上の準備作業としての経済社会学の分野。これは、新しい、重要な展開を含んでいる。

## 1. 革命的サンディカリズムとエリート理論

ビーサムは、ミヘルスの「サンディカリズムとの決別」は、1907年のトリノ移住とトリノ大学就職で決定的になったと解釈する。逆にいえば、このトリノとモスカとの出会いが無ければ、ミヘルスの方向転換はなかったということになる。<sup>(4)</sup>

ミヘルスとトリノとの交渉は、しかし、07年よりはるか以前にまで遡ることは想起しておこう。確かに、モスカとの出会いが重要なことは間違いないが、といって、ミヘルスがサンディカリズムからモスカ学派に突然、いっぺんに転向したわけではない。

後述するように、ビーサムはこの転向を、サンディカリズムとエリート理論の反（議会制）民主主義としての共通性によって、興味深い仕方で説明する。

モスカとの出会いは、エリート理論への接近のみならず、ミヘルスが科学としての「政治学」ないし社会学を自覚しはじめたことをも意味する。

といて、1907年を境に彼が民主主義と社会主義への思想的支持をいっぺんにすっかり、捨て去ったわけではない。また、思想的情熱と科学としての没価値性とがミヘルスのなかで同居していることは解釈を要求する。科学の使命は、社会主義や民主主義の物神崇拜を戒めることに存するとは、ミヘルス自身も述べているところであった。<sup>(5)</sup>

彼が同時代人のフォアレンダーを評価するのもその点からであった。

フランス語で書かれた「実証主義的社会主義の倫理的側面」(N. 211)は、いわば、「マルクスとカントとの実り多い総合」を意図したものである。ミヘルスはこの総合という企図の第一人者としてカール・フォアレンダー(1860-1928)をあげている。そして彼に習って、ミヘルスはこう主張する。応用倫理学は経済関係の「反映」でしかなく、労働者の解放闘争は、ブルジョア道徳、そして「道徳それ自体」を否定し、階級エゴの貫徹で十分だとするマルクス主義者に反対する。モラルに対する「軽蔑」は「労働者階級の発展と闘争に有害である」とし、倫理(学)は、階級対立と階級闘争の中で「不可欠の使命」を果たす。

プロレタリアートの「自分の義務の信念」のみが「戦う労働者の階級意識」と「階級の連帯感」を強めることができる。拠って、プロレタリアートに、「人類に対する労働者の権利と義務」を自覚させることが「社会科学」の重要な使命となる。この議論では、階級意識の形成に社会「科学」が、積極的に貢献するというかたちで、うまく接合する。このような、科学主義的エリート主義は第二インター内部では常識的だった。したがってミヘルス独自のものではない。<sup>(6)</sup>

「戦いの中で、倫理的権利の自覚はダイナミックな契機へと変化する。それは労組の金庫よりも効果的である。」金庫は、喪失の恐怖のために、戦いの「阻害要因」となる。(金庫が労組の保守的機能を果たし、オリガーキーの契機になるとのミヘルスの認識についてはいうまでもないだろう。)

結論として、ミヘルスはこう断言する。社会主義者の急務は、「道徳

のプロパガンダ」によって、「自分たちの方に権利と正義があることを分からせる」ことに存する。マルクスはそれを「科学」によって証明しようとしたが、ミヘルスは道徳的に訴える必要性を証明する。マルクスのエピゴーネンはプロレタリアートの倫理的権利を「あまりに評価しなさ過ぎる」と批判する。

フランス革命も啓蒙無しには不可能であったろうという、アンリ・ハイネの説が紹介される。それは、貴族と僧侶の特権層を道徳的に無力にした。「倫理的な言葉の持つ鋼鉄のごとき力」を侮ってはいけない。といって、ミヘルスが闘争の主観的契機のみを強調したわけではない。それには「経済的と社会的な条件」による限界が存在する。しかし、倫理はプロレタリアートの闘争に関する確信を強めるだけではなく、ブルジョアジーの自信を失わせる。自分の権利への自信を失った階級は自ずと、消滅する。(これはパレート的である。)以上が青年ミヘルスの社会主義と倫理についての持論であった。

ところで主意主義的マルクス主義については、ソレルを抜きに語れないのだが、この論文でミヘルスは、ソレルと自己との違いを明確にしようとしてとめている。

ソレルが必ずしも革命的サンディカリズムの旗手ではなかったと同様、ミヘルス自身をソレルの弟子としてのみ見るわけにはいかない。むしろ、両者の距離に注目すべきであろう。当時の日記でミヘルスは、ソレルを「ひどくブルジョア的だ」と評していた<sup>(7)</sup>。

この「実証主義的社会主義」論文では、ミヘルスは、ソレル流主意主義に対して、「マルクスの実証主義」を評価しているように見える。

フランス革命が啓蒙主義によって道を開かれたとするミヘルスは、自分が、この革命につながる合理主義、進歩主義、民主主義の大道に属していることを自覚的に主張していた。

ソレルが、マルクスをニーチェ、ベルグソンと結びつけるのに対し、ミヘルスはマルクスをカント、ボルテールと結びつけて解釈しようとし

(8)  
ていた。

ところでモスカは、ミヘルスよりもはやく、1902-3年より、トリノ大学へ赴任した。この就任に際し、「貴族制の原理と民主制の原理」と題して開講講演をおこなった。そして、自ら創設したと信ずる、政治学の「新しい考え」を披露することになる。ミヘルスとの思想的影響関係を確認するためにも、簡単に彼の講演を紹介しておこう。

モスカは、アリストテレス以来の政治形態3分類説に対し、2分類説をとりあげ、こちらのほうがより「古い」と主張した。貴族制と民主制の原理である。その起源は、古代ギリシャの自由市民の、貧富の2派閥にある。

そして、この2分類説の思想的先駆者としてはボーダンを嚆矢として、その後、「政治科学のマエストロ」によって「社会的真実の隠された真相を仮象から見極める」科学作業が進められ、その結果、1883年、自分の「新しい理論」が初めて提起されたのだ、と自負を込めて語られる。イタリア以外でも、Hammon, Navikof, Rensi, そしてパレートの名があげられている。

この理論によると、民主主義や君主制は「支配する階級」内に位置づけられる。すなわち、これらの政体は、「種々の支配階級が補充されるその仕方」にはかならない。したがって、「いわゆる民主主義は、同じく、支配する少数派が形成される、多くの基準のひとつ」でしかないことになる。

しかしモスカは、この理論が「多数者の利益とか社会全体の利益の改善」を一切認めない「懐疑論と宿命論」とはまったく無縁だと断言する。それはエリート論者が「断固」拒否するところだ、と。「社会の改善」を志向するエリート論も存在する。(パターンリズム) 反対に「時代の要求」を満足させないエリートの支配する社会は「解体」する、と診断する。

以上が、エリート論の「重要な帰結」となる。

最後にモスカは、この新しい理論の提起した「微妙な問題」について語っている。彼は民主主義を二つに分ける。まず、「政府」の正当性を根拠付ける多数派、という意味での民主主義だが、これをモスカは否定しない。ただ、「実現不可能」とするだけである。第二の民主主義は、権力への開放性の意味である。いいかえると、「生まれの特権」の消失、ということになる。しかし、この意味での民主主義が未来に勝利するかどうかについても、モスカは不明とする。

いずれにしても、モスカは民主主義の原理に信を置いていないことは確かであろう。

ところで、当時のそのミヘルスは、モスカをどう考えていたか。はじめて正面からモスカを取り上げたのが、ルイーゼ・エイナウディが編集する *La Riforma Sociale* 誌に書いた「憲政上の有機的なオリガーキー——政治階級の<sup>(10)</sup>新研究」(N. 215)であった。これは前年のうちに書かれ、12月までには発表されていた。(注、リストでは08年に登録されている。)これは、ゲラ刷りの段階でモスカに送られ、好意的な評価を得ていた、という。

ミヘルスのモスカに対するオマージュなのであろうか。しかし、ミヘルスがモスカの立場にすっかり乗り換えたというのは、あまりに単純な想定である。というのも、本稿のはじめで、「政治階級が不可欠の要因であり、民衆の社会的生活で持続的価値を有する」との命題について、ミヘルスは、「認めがたい」と断言しているからである。そして、賛否は別にして、理論をそれ自体として考察しようとする。その考察の過程で『政党の社会学』の骨格をなす諸論点を取り出されてくる。またその際、社会主義理論とエリート論とのある共通性を拾い上げることになる。それはミヘルスが後者を採用するのを容易にする分析枠組みとなる。

この論文は二つの部分よりなる。先ず政治階級の教義上の起源について、ついで、その社会的基盤について、である。

モスカによると、貴族制と民主制との間の「永久の戦い」は、結局、新旧の「少数派」の間の戦いでしかない。階級闘争が「少数派の交代」に還元される。そこで、「政治定式」は革命と新しい権力の正当化の「機能」を果たす。「無階級社会の創設」もイデオロギーでしかない。従って、「多数者の解放」と階級の消滅はありえないことになる。ここでミヘルスは、後に有名になる命題をモスカに仮託して述べている。「人類の多数者の自治は不可能である。……人間の多数者は過酷な運命の力により、少数者の支配を受けるか少数者の栄光の踏み台としてつかえるかそのどちらかでしかない。」ミヘルスはこの教義の先駆者は結構古くから存在するとして、数え上げる。テーヌ、ルードヴィッヒ・グンプロヴィチと並んで、多くの社会主義である。サンーシモン、コンシデラン、フーリエそしてバクーニンである。(思想の基本を無視した非常に恣意的な牽強付会であり、その片言双句のみを取り上げるやり方は、いつものことだが。ただ、エリート理論の思想史的補完として、社会主義者やアナキストを無理強いしたのはミヘルスならではの功績といわねばなるまい。)

ミヘルスはモスカを「民主主義という神に対する科学的無神論者」と称している。(N. 215) モスカは、「多数者の民主主義という強力な伝承」に正面から攻撃を加える。そして、「民主主義では、法的原理と事実とがいつも簡単に混同される」というモスカの持説にミヘルスは注目する。

ミヘルスは、モスカの理論は、バクーニン社会主義が生まれた前提をなす要素のすべてを萌芽的に含む、として、バクーニンとモスカの親和性を指摘する。これは一面的だが、暗示的もある。階級社会と階級対立が存在する限り、事実の認識に違いは無くとも不思議はない。

ミヘルスによると、この社会主義者とモスカ、パレトとの唯一の違いは、その「診断」の違いにある。一方が「政治階級の存在を善とし、実り多い文明の唯一の可能性とみるのに、他方は、すべての悪の源泉、

劣悪で反道徳的な文明に有力な兆候と判定する。」的確な区別であり、先に触れたように、ミヘルス自身は、いまだ前者の見地に立つまでには至っていない。

それに続けてミヘルスはこのエリート論の動機に触れて、階級の生成の源泉を探求しようとする。

政治階級論を支持する社会学的傾向を分析する過程でミヘルスは、「政党の社会学」の論点を整理し始めている。しかも、その論証に社会主義者の主張が数多く採用されるのである。

1) 多数者の政治的無関心。「多数者にとって国家はどうでもよい」とのモスカの説を紹介しながら、代議制の幻想に触れる。無関心な多数者のために、代表への「主権の自由で自主的な委託」という代表制の想定は誤っているとのモスカの主張を、ミヘルスは「非常に正しい」と評している。前年のカザリーニとの論戦で反証された「代表」論の延長である。だが、ここで浮上した「人民主権」の信念と政治的無関心とはどう折り合いをつけられるか、が問題である。

ただ、この無関心は教育と経済条件の変化で克服しうる、と注記してはいる。

決定的な結論は、議会制の幻想という主張であろう。ピサカーネ、コンシデラン、ブルードン、マラテスタそしてカツツキーまでもが動員される。代表の幻想性は、一時的なのか（つまり歴史的なのか）、それとも、政治社会の鉄則なのか、ミヘルスはどう考えているのかははっきりしない。ともかく、大衆社会における民主主義の危機にどう対応するかという基本的問題が背景あることは疑いない。

2) 政治階級の自衛策としての国家官僚制の発展。国家官僚制はその需要と供給の面から考察される。それを必要とするのは、「今日の社会秩序の欠陥」のためである。中間層の増大が官僚予備軍を形成する。国家によって、直接、間接（再分配）に養われる「社会の大きな部分」は、しかし、ミヘルスによると国家の「奴隸」なのだ。

この中間層分析はミヘルスによる権力論への独自の貢献として評価できる。モスカにはそもそも、階級分析はみあたらない。

3) 政治階級の成立に関して、モスカにはできなかった、ミヘルス独自の貢献は、政治階級予備軍としてのプロレタリアート論であろう。先ず、出世機構としての労働者組織は、軍隊やカトリック教会と社会的に同じ機能を果たす。ミヘルスによれば、これは、「近代の社会生活の謎を解く鍵を提供してくれる重要な現象である。」そして、SPD がその証拠としてもっとも役立つ、という。

ともあれ、プロレタリアートが自らの代表を押し立て、全権を委託することで、彼らを自階級から「疎外」させることになる。敵階級の手中に投げ入れてしまうからである。脱ブルジョア（ブルジョア・インテリ社会主義者）と脱プロレタリアという二つの階級離脱、言い換えると、階級間の個人的な相互入れ替え、という現象は「悲劇的側面」をもつ、とミヘルスは語る。

このようなエリート理論に対抗できる唯一の教義としてミヘルスはマルクス主義をあげる。そのブルジョア・デモクラシーと国家（政治階級）への攻撃という点で、「新しいマルクス主義」つまり、サンディカリズムは有益だという。しかし、この国家と民主主義に対する、「科学的懐疑」という点ではモスカ派も共通だというミヘルスは述べる。こういう思考の流れは、ミヘルスの思想的変移を正当化する上で役立つといえる。

PSI（イタリア社会党）は、1908年9月19-22日、フィレンツェで第10回党大会を開いた。そこでは、革命的サンディカリスト・グループが欠席のまま党を追放される。もっとも、それは前年7月に党から分離する決議をおこなっていた。11月には、労働総同盟からも離反し、若干の労働評議会を拠点とするようになる。かくして、社会主義と労働運動は二つの潮流に分裂することになった。

このフィレンツェ大会についてミヘルスは、サンディカリズム・グループの一人、エンリコ・レオーネ宛、その編集になる *Il Divenire Sociale* 誌上に公開書簡を載せる。「イタリア社会主義問題についてのメモ」(N. 212) そこでミヘルスは、「革命的な潮流」に、理論的というより、本能的に与すると、自分の政治的立場を言明しながら、分裂には反対だと述べていた。従来からの立場である。

サンディカリストが罵倒する改良主義者は、ミヘルスによると、さほど墮落はしていない。そこには、まだ「いくらかの健全な、善良な思想がまどろんでいる」と評価する。(その例として、前年論争したカザリーニ論文をあげている。)そして、ミヘルスがここで、改良主義者を逆に高く評価すると述べるのは、彼らの「プロレタリアートを公平に論じた」点である。つまり、「イタリアのプロレタリアート大衆は——ほとんど全世界のプロレタリアートと同様——」社会主義革命を達成するにはいまだ不適であるという「事実」である。そのプロレタリアートは「依然として全く未熟であり」、彼らによる革命は、「文明の破産と、労働者階級自身の挫折」より以外の何物をも意味しないだろう。

この「未熟」命題は、裏から見れば、プロレタリアートがインテリに依存していること、インテリ無しには何もできないことを意味する。

さらに、この論文で興味深いのは、サンディカリズムにより提起された、民主主義と社会主義の関係の問題の考察である。というのも、ミヘルスはサンディカリズムの優れた利点として、その「反民主主義的本質」、つまり民主主義の有効性に対する懐疑を上げているからである。

サンディカリズムの反民主主義は、PSI がその支持層の階級的構成からみて、いわゆる階級政党から国民政党(包括政党)へと変じ、「理想主義的、革命的な傾向」を捨て去らざるを得ないこと(プロレタリアート票だけでは議会で多数派にはなれないから)、こういう PSI の政治への反動と関連している。

ここでミヘルスが民主主義と呼んでいるのは、PSI の議会主義戦略の

ことであり、そういう前提で次の文章を読むべきであろう。

「民主主義は社会主義ではないし、それに決してなれない。二つの間には深淵が存在する。それどころか、民主主義は労働者階級自身にとって危険に満ちている。民主主義によって、彼らは、階級の観念をすっかり失い、素朴に政府のことを、貧相なメイドであっても、主人と信じ込んでしまうからである。

民主主義は、戦闘者の油断のない元気なグループによる不断の統制がないと、プロレタリアートにとっては成果をもたらしえないだろう。民主主義は有害だ。サンディカリズムが存在しない限りは。」

PSI は、社会主義を実現しようとする限り、サンディカリズムの刺激を絶対必要とする。これは青年ミヘルスの持論であった。

そして、理想であれ現実であれ、議会制民主主義は、エリート論者もサンディカリストも拒否するところでは共通だった。

この年、ミヘルスは、エインリーコ・フェッリ『革命的方法』独語版に、長い序文（「近代イタリア社会主義の理論的發展」(N. 217)）を書いた。これは、それまでのイタリア社会主義史研究を簡潔にまとめたものである。

フェッリ（1851-1929）は、反改良主義の社会主義者で、1903年より08年まで『アヴァンティ』の編集長をつとめていた。ミヘルスの独訳したフェッリの冊子は、1902年に書かれたもので、左右の修正主義の教条主義化を批判することを意図していた。翻訳は、ミヘルス個人のフェッリへのある程度の共感を抜きには考えられない。従ってミヘルス自身の思想を推測する意味でも興味深い。フェッリは議会主義と選挙をそれ自体としては否定しない。それどころか、それらは改良主義的とも革命的ともなりうる。そこで決定的になるのは、社会主義意識と組織の形成であった。階級意識が重要なポイントとなる。フェッリにとって、社会主義運動で枢要なのは、戦術の如何ではなくて、社会主義意識と組織の形

成にこそあった。人民にその意識を教育すること、これが中心課題となる。「無知と奴隷根性」から解放するという、イタリア独自の後進性を反映した戦略が主張された。

またこのフェッリ論文には、ドイツ人読者を念頭においた、ミヘルス自身の懇切な注釈がついているのだが、その中でミヘルスは、フェッリの（議会での多数派獲得後の）「プロレタリアート独裁」を支持する主張にたいして、批判をくわえる。フェッリの主張は「あらゆる独裁、あらゆるオリガーキーに門戸を開く」、と。

さて、ミヘルスの序文で興味深いのは、ミヘルスのバクーニン解釈である。そこには、ミヘルスの移行の論理が伺える。つまり、先にも触れた、エリート論受容に繋がる、イタリア社会主義者の思想的特長がそこで、汲み取れる。

バクーニンがイタリアに初めて社会主義をもちこんだことは周知のことだが、マルクと異なってバクーニンを特徴づけるものをミヘルスは指摘する。バクーニンの社会主義思想は、第一に、「マルクスのように、この社会の非合目的性と歴史的に必然なその解体の認識にではなく、この社会の非道徳性の認識に基づく。」

第二に、国家を邪悪それ自体と考えること。これは、特に真新しい解釈ではない。次の叙述が、新しいミヘルスの見方であろう。そして、それはモスカの宿命的な少数支配を連想させる

ミヘルスによると、イタリアの社会主義革命家は、バクーニンと共に、次のような確信を共有している。即ち、人間は、その手にある「政治的、経済的力を必然的に悪用」する特性がある、社会主義者のうちにさえ、「功名家、専制的人物、独裁者」が生ずる、「人民の殉教者が人民の抑圧者に変ずる」こともあるという確信、これである。このような「心理学的源泉」から、イタリア人革命家の国家観、民主主義観が生ずる。「いかなる組織された権力も、それが人民の自由を幻想的たらしめる」、と。

階級支配の道具としての国家観をマルクスと共有するが、彼らはさらにここから「究極的結論」を引き出す。「彼らにとって、国家は支配と同義であり、あらゆる支配は支配階級を前提とする。したがって、君主制と民主制・共和制との間には、質ではなく、量の違いがあるのみである。両国家形態において国家は同じ様に、所有階級の経済利害を代表する。」

「支配は、アプリオリにすべての人民の権利を無きものとするので、例えば、プロレタリアートの選挙への参加も無意味である。なかんづく、経済的・心理的原因の複合体が、この行為からあらゆる意味を奪う。人民の選挙権は、自分で自分の支配者を選ぶという人民の権利を意味する。」  
(これは、まさにモスカの主張ではないか。)

しかし、次こそバクーニンの真骨頂である。そしてこれは、理論的に決定的である。

「したがって、——とミヘルスは続ける、——改革の唯一の道は、その全機構における国家の破棄である。」

ミヘルスは一貫して、議会制をアプリオリには否定していない。

ミヘルスにおける民主主義の観念と理念で、前者について、彼は、民主主義を、直接デモクラシーと定義する。従って、代議制に否定的な民主主義観である。

後者についても、前年（1907年）の論考からも分かるように、理念としての民主主義を支持している、もっとも、その理念としての民主主義の実現可能性については彼においても不明である。（もちろん、モスカはそれを不可能とする。）

以上の議論は形而上学的で、生産的ではない。過程として民主主義を捉える視点が重要であることは、ミヘルス自身も自覚していた。問題を「傾向」として捉えるのは、オリガーキーを民主化傾向の阻害要因とみているからにほかならない。

ミヘルスの民主主義理解は、実は、彼の中心対象である、社会主義組織から伺える。代表制に関するカザリーニーとの論戦はそのひとつであった。

そして、青年ミヘルスの社会主義思想で我々を悩ませたサンディカリズム問題から、彼の民主主義観を引き出すことができる。フェッリ「序文」でミヘルスは、ミラノで1882年に結成された「職工党」partito operaio を繰り返し紹介しているが、このことは彼がそれへの関心を持續していたことを示す。

職工党はバクーニン派やマロン派とは異なる、純粋に労働者だけの政党を志向していた。「労働者の、労働者のための、労働者自身による解放」を掲げ、「労働者階級の主権」を力説していた。(勿論、イタリア特有の事情を反映している。つまり労働者組織への「顧問、庇護者、パトロン」としてのブルジョア・インテリへの反動である。)ミラノにおける、ブルジョア・デモクラシーの成長もその遠因の一つである。しかし、ミヘルスは、この考えは「誤解」に基づく、と判定する。この「労働者の主権」説には、「何か非情なものがある」と彼は語る。「職工党は決して理想主義や心情の友ではなかった。それは冷酷で、愛のない工場の壁の中や貧乏長屋の中で生活するプロレタリアートの精神」の産物である。一方、「社会主義者の方は、それに対して、人民に対する愛で満ち溢れたブルジョア、寛大な心の持ち主であり高邁な思想の持ち主であり、日々の分け前を気にする必要がなく、萎縮することのない目標を迫及する理想主義者、革命家だった。」職工党な長続きしなかった。というのも、プロレタリアートは「日々のパン」のようにインテリを必要とするからである。

イタリア社会主義・バクーニンとエリート論との思想的な緊張関係が生じ、ミヘルスの葛藤が一層深まる。

ミヘルスにとって、インテリ社会主義主義者は、モスカらにとつてと

のエリートと同じと考えてよいのだろうか、という問題が生ずる。というのも、ミヘルスは、社会主義運動にとってインテリが不可欠と信じていたが、モスカも政治階級が不可欠としていた、この意味で共通だからである。つまり、結局大衆自身の自治能力の評価が問題となる。この点でミヘルスの「職工党」への持続的関心は、サンディカリズムへの関心と同様、直接民主主義へのこだわりを暗示している。知識人と直接民主主義、両者が、ミヘルスのなかでどう整合的になるか

ここで、同じサンディカリズムといっても、フランスとイタリアそしてドイツのそれが異なることを確認しておこう。ミヘルス自身、『イタリア社会主義運動におけるプロレタリアートとブルジョアジー』（1908）で両者を比較して、フランスのサンディカリズムは「イタリア・サンディカリズムとは著しく異なる」と断言している。党と労組の関係が焦点となる。フランスでは、党は「プロレタリア階級の活動の範囲の外」に存在している。他方、イタリアとドイツでは、党は労働者の「知的生活」の一部をなし、「純粋な願望」を代表している。従って、労組は党のイデオロギー的土台をなす。また、フランスのプロレタリアートは、「議会の幻滅経験」にうんざりしており、「民主主義の夢」を失いつつある。これには、社会主義者の入閣と裏切りが作用した。対して、ドイツとイタリアのプロレタリアートはまだ「議会制」に幻滅してはいない。よって、「ドイツとイタリアのプロレタリア大衆は、いまだ、政党無しに過ごすことにはなれていないないし、議会に幻滅もしてはいない。」<sup>(11)</sup>

ラブリオーラは運動の中心を、経済組織のプロレタリア大衆に置きたがっていたが、議会活動にも利点があることは、否定していなかった、（1913年には自身が国会議員になっている。）

## 2. 組織された資本主義

1908年にトリノ大学に就職したミヘルスは年末12月1日、就任講演を行った。「経済人と協同」と題する、経済社会学とでもいえそうな新分

野をテーマとしたものであった。これは翌年、ドイツ語（アルヒーフ）とイタリア語（Riforma Sociale）の双方で発表された。<sup>(12)</sup> 後者はムッソリーニも読んだといわれている。

これは、ミヘルスの思想的発展でも独自のものであり、ある意味で「政党社会学」の基底にある、歴史的理解と関わってくる。

この「経済人」講演は、新しい仕事と研究領域に取り組むミヘルスの姿勢を示しているのだが、そこでミヘルスは、現代資本主義経済の発展によるマルクス主義の基本的想定<sup>(13)</sup>の修正を試みる。

先ず、20世紀の政治社会の基底部分での巨大な変貌が確認される。

「今日、経済領域では、個人主義の時代は決定的に終了したと考えてもよからう。経済人は、今では、団体の一要因としてのみ存在する。」

この団体としてミヘルスは、経済的には労組、消費協同組合、生産協同組合のみならず、ツンフトやトラストという資本家の組織をも数える。いわゆる、「組織された資本主義」を意図していると考えられる。<sup>(13)</sup>

政治的には、政党がその団体の代表である。

こういう経済的組織の必要性は、経済人の行動原理としての功利主義、「最少の入力と最大の効用」を追及する結果として生ずる。こういう主観的条件とならんで、労組を生んだ経済的条件が述べられる。経済的自由の時代は、同時に、むきだしの「個人的利害、私的利害」が猖獗を極める時代であることを意味する。近代的個人は、中世の組織（ツンフト、教会）から解放されて、独立自由の「経済人」となった。その結果、彼は、経済人の「経済的情熱」の「玩具」と化す（自己疎外）。競争と「肉体労働者の悲惨」が時代の兆表である。この「経済での極端な個人主義」への批判は、サン・シモンからマルクスまで多くの社会主義を生んだ。彼らには共通する二つのライト・モチーフがあった。

- 1) 経済人としての無力さ（生産手段を持たないため）、
- 2) よって、「協同原理を社会経済生活に再導入する必要性の認識」。

この連帯の思想は、「誤解された自由の観念の僭越——それは、貧し

いもの、悲惨なものにこう叫ぶ、「自分で処理せよ」——に対する、社会的結合の権利の根本的な肯定」に他ならない。

具体的には、労組に加えて、生産と消費の協同組合が中心的担い手となる。そして、それらを統合するものとしての政党である。これらにおいて、資本主義と私有財産からの解放を志向する点で、なるほど、社会主義的と言いうるかもしれないが、ミヘルス自身は、それには限界があると語る。

ここで、ミヘルスは重要な確認をする。

1) この団体が歴史的に必然的であること。したがって、哲学者や政治家の衝動や宣伝から生まれた（モスカはこう考えていた）のではなく、「資本主義生産過程におけるプロレタリアートの特有の経済的地位」より生じた、ということである。従って、「社会主義は、現代社会の特定の経済的要因の複合体のイデオロギー的反映である。」そして、諸組織は「現代の国民経済の解き放たれた盲目的力」に翻弄される労働者にとって、唯一の脱却の手段に他ならないこと、これが先ず第一。

2) 他方、この組織にもオリガーキーの可能性が存在すること。ここで、ミヘルスはモスカを参照し、労働者自身による「平等な社会」実現の不可能性を述べる。「このプロレタリア階級自身の間にも、オリガーキーが形成される傾向」が観察されるからである。

社会主義とオリガーキー、これまでのミヘルス思想の中心テーマがこの「経済人と協同組合」についての就任講演でも再現する。しかし彼自身は十分な解決策を見出していない。

組織された資本主義は資本の組織化、「個人的資本」から「社会的資本」への転換を意味する。トラスト、カルテルが市場の無政府性を解消させる可能性に触れ、それを、「オリガーキー資本主義のヘゲモニー下にある、商品生産と交換の国家的組織の構想」と定義したラファルグの説をとりあげている。要するに、組織された資本主義に含まれた両義性（矛盾）の問題である。にもかかわらず、究極のところミヘルスはこの

組織化の傾向はどの階級、階層からも歓迎されていると積極的に評価する。ここに、資本主義的自由市場経済と社会主義との間の中間的な経済体制を構想しようとするミヘルスの意図を読み取ることもあながち不条理でもない。

この延長には、社会主義とマルク主義の基本的前提である階級観と窮乏化論への実証的批判が待ち受けている。

「階級分類」に「科学的価値」をもたせようとする、俗流唯物論を批判せざるを得ない。経済的、物質的要因のみならず、理念や伝統や哲学も重要な歴史の形成要因となる、その結果、階級分類は複雑となる。いままでミヘルスが、階級と性道德の関連で調査してきた成果が一般化される。理念が自らの階級利益に逆らって作用することもありうる。(貴族出身の革命家、小作人の地主への盲従)。こういう交錯した階級の利益と意識、階級エゴと連帯の矛盾を超えて、政党という「協同組織」が形成される。ミヘルスは、政党で優越するのは、階級利益よりもそのイデオロギーであると断言する。

しかし、ミヘルスはこの協同組織論を発展させて、組織の対外、対内での衝突を論ずる。端的には、生産協同組合と消費協同組合の対立や、消費組合自体内での雇用主と被雇用者(同一組合内の従業員)の対立、がそれである。しかも、後者についてミヘルスは、「自分の搾取には敏感な労働者も仲間に対する搾取には鈍感になる」という「悲しい芝居」だと名づけている。

これらの利益の衝突は、社会的利益が多様になったことに起因する。したがって、衝突に際限がないとしても「悲観的」になる必要はない、と説く。共同性と多様性の相克にたいし、「学問の世界」がそれに、一つの脱出の方向を提示する。この講演の最後でミヘルスは政治の世界から学問の世界へと移り住んだことを宣言したように見える。自分の就職に尽力してくれたアキレ・ロリアの、政党は「学問に義務を有するが、学問は政党にたいし義務を有しない」、ということばを持って本稿を閉

じている。

政党については、本稿でもたびたびとりあげた、『イタリア社会主義運動におけるプロレタリアートとブルジョアジー』（緒論）でも、個人と国家の間の、「第三の分野」、「第三の要素」として位置づけ、国家内国家としての政党組織は、「現代の民衆の歴史でもっとも重要な要素」と断言していた。

しかも、理念としては、労組とならんで（またそれ以上に）、党を肯定的に高く評価していることここで銘記しておこう。

### 3. オリガーキー論と政治学

先に触れた「社会のオリガーキー傾向」論文（N. 210）に対してベルンシュタインが、同じ雑誌に反論の一文を書いた。<sup>(14)</sup>そこでベルンシュタインは、ミヘルスのテーゼ自身に誤りは無いととみとめつつ、ミヘルスの危機感は共有していなかった。オリガーキーは技術的必然なのだ、「実践的必要」の結果である、と。

「ルーティンは容易に職員を官僚にし、特権的地位の数を増し、その地位にある人々の結合ができあがると、オリガーキーが生まれる。その傾向はいたるところに存在する。故に、職員を廃止し、特権的地位に誰もつけないようにすべきだろうか。それは、機械的に捉えた平等のために、発展と成長を放棄しようとすることを意味する。何故なら、有機的変革無くして成長なく、分節化無くして発展は無いのだから。」

この批判にミヘルスは応答した。（N. 205）もっとも上の分析について、ミヘルスはベルンシュタインと「同意見」だと述べる。

しかしこのときのミヘルスの問題関心には、「オリガーキーとの戦い」とオリガーキーの科学的分析との双方が共存し、さらに重点が後者に移行し始めていたことは認めねばならない。ともあれ、この小論で、後に有名となるオリガーキー命題が初めて提出された。

「君が組織について語るときはいつも、オリガーキー形成の傾向につ

いて語っているのだ。」

ただ、これは、「組織の原理」に「死刑判決」を下すことではないと、留保はつけているが。ともあれ、この1908年にミヘルスは、「学問の仕事」へと一歩踏み出すことに決心したことには間違いない。組織問題にとりくむ姿勢には2通りあるとミヘルスはいう。「政治家」として、と「研究者」としてである。そしてミヘルスは、Warumではなく、Wieこそが問題だとする。「なぜなら、学問の仕事では、事実の確認を最重要課題とみなさねばならないから。」

その学問の仕事の成果が、ドイツ語とイタリア語の二言語で発表されたオリガーキー論文であった。（「社会のオリガーキー傾向」N. 210, 「憲政の有機的オリガーキー——政治階級の新研究」N215）イタリア語で07年12月に既に発表されたものを、ドイツ語で「社会のオリガーキー傾向」として発表した。

両者でミヘルスは、政治階級論の理論的起源を尋ねる考察をする。いわばその知的先行者問題である。

ミヘルス特有の方法が、ここでも採用される。一見対立する現象や思想家にも同一の現象や思想を見出すことで、命題の普遍妥当性を証明しようとする。この政治階級思想についても同様で、それを社会主義やアナーキストに求める。

また、イタリア語版では、「政治定式」の議論がなされるのはモスカの講演（1902年）の影響であろう。（後述）

「国家もしくは権力について語るときは支配について語っており、すべての支配は、支配される大衆の存在を前提とする。」このバクーニンの命題によって、社会主義やアナーキズムを、エリート論の知的先行者とする説明は、次の判断によって、大きく、かつ根本的に制約されるはずであった。しかし、ミヘルスはそれを重大とも、根本的とも考えてはいないように思える。

こうまとめる。この社会主義派とモスカ・パレト学派との唯一の違い

は、その「診断」にある。一方は、「政治階級の存在を善とし、実り多い文明の唯一の可能性をみるのに対し、他方は、すべての悪の源泉、劣等で反道徳的な文明の有力な兆候と判定する。」

そして、ミヘルスは続けて、この「政治階級」を不可欠の要素、民衆の社会生活で持続的価値を有する要素とするモスカ・パレトの説には、「同意できない」と断っているのである。いささか、付けたしの気味があり、彼はこの問題にこれ以上立ち入らないと、表明している。

そして、むしろ政治階級の発生の社会学的探求へと進むのである。「そちらのほうが興味深い」と。

もう一点、両論文の論及対象が社会のオリガーキーとされたこと、政党や労組はそのケーススタディ、ないし、論証の材料とされたことが注目に値する。ともかく、この論文は、モスカ学派の理論とミヘルス自身のこれまでの政治的経験との総合を意図する、最初の試みである。『政党の社会学』の前段階を意味する。

ここで、モスカにとって政党とは何だったのかという問題に触れとみると、モスカは「自分のエリート理論にとって、近代政党制のもつ重要性を見失っていた」と言われている<sup>(15)</sup>。ここにも、モスカとミヘルスの政治観の相違が伺える。

ところで、党と国家のレベルの相違の問題に対するミヘルスの無関心は、この間のオリガーキー論への彼の基本的姿勢である。

ミヘルスはドイツ語版でこう述べている。「多くの識者によって強調され、最近あらためてモスカによって強調された多数の受動性〔これは、経済的条件の改良と教育によって対処できる、とされる……引用者〕と世襲制のみが、少数の支配を支えているようには思えない。」代表制の「蜃気楼」効果が、重要となる、として、労働者党のオリガーキーが論ぜられる。ここでも、国と組織のレヴェルが混同している

この代表制＝「蜃気楼」観、の背後にはミヘルスの愛着した、イタリア政治への現実経験が作用し始めたことが考えられる。といっても、政

治的腐敗は1880年代から始まっていたようである。<sup>(16)</sup>

民主主義の原理として議会制を幻想たらしめるのは、代表制それ自身の「本性」にある。「人民の主権を委託することはそれを放棄することだ」との、コンシデランの言葉に集約される、議会制民主主義の内部矛盾は夙に、知られていた。

前年、カザリーニとの論戦でミヘルスは、上の議論に基づいて、カザリーニの、幹部＝党の代表、説を批判していた。それをミヘルスは、「民主主義の形式で覆われた貴族制」と命名していた。それに対し、政治家としてのミヘルス自身は、「組織された労働者大衆の代理人」たらんとしていた。

政治家を断念していくにつれて、後者の自覚も後退し、政治的信条としてはすっかり抜け落ちてくる。学問的立場からは、問題ともならないかのように。

事実認識は科学的心情を満足させただけでなく、政治的信条にも影響してくる。政治階級論を支持する社会学的傾向は、「政治階級や支配階級無しには市民社会は存続し得ないと説く者に役立つ。」このような「科学的確認」はつぎのような結論へとみちびくに違いない。つまり、「オリガーキー権力の限界についてのすべての研究を放棄し、人民主権を完全に適用できる社会秩序の創造についてあれこれ考えをめぐらすことをやめること、これである。」さらには、「民衆の運動には何も値打ちが無い、と歴史自身が教えてくれているように思える。」実践（的思想）の放棄以外のなにもでもない。「大衆は、……エリートのみちびき台をしての運命が定められているように思える。」

だが、ここでミヘルスは微妙な所見を付け加えている。

国家が支配階級の道具でしかない、マルクス主義とバクーニンは説く。革命的サンディカリストはこれを徹底し、民主主義とブルジョア国家そのものに攻撃をしかける。このブルジョア民主主義とブルジョア国家に対する彼らの「科学的懐疑」は、モスカ派にも共通だと、ミヘルス

は語る。「もっとも、国家と階級支配のない社会主義社会はユートピアである。」ともあれ、ここからこう推測できるのではないか。モスカ派とマルクス主義に共通する部分で、またその部分でのみミヘルスはモスカを取り込んだ、と。

繰り返すが、ミヘルスは、国家のオリガーキーと組織のオリガーキーとの区別を重視していない。

「国家官僚制」は論ずるが、党の官僚制ではない。

国内内デモクラシーと党内デモクラシーの違いはない（ドイツ語版，S. 104, S. 120）というのが前提にある認識である。

同時に、ミヘルスの党問題への姿勢に変化が生じる。即ち、歴史への積極的介入の手段（大衆の社会主義教育）といスタンスから、一切の幻想にだまされるなというリアリストとしてのそれへの移行である。オリガーキーの危険性を絶えず認識してこそ、民主主義の墮落を防ぐことができる。

「民主主義の貴族主義的危険性への明晰で曇りない洞察のみが、この危険性をなるほど、ふせぐことはないとしても、減らすことはできよう。」

初めて政党のオリガーキーを正面から論じたのは、翌年1月の社会学会で発表された「政党組織の保守的性格」<sup>(17)</sup>であった。そしてこの間の展開からこう推測できる。

1) オリガーキーを、「社会」という一般的地平で論ずるということは、ミヘルスの着想過程では、まず、オリガーキー命題が先行していたということ。政党（労組ではなく）はミヘルスにとって、いわば最後の思想的拠り所であったことの名残だろうか。

2) そしてこの一般的命題——これにモスカの影響は無視できないが、他方、バクーニンもかかわってくる——が、遂に、政党に適応させられたこと。言い換えると、政党にも「科学的」視線が、やっとな注がれはじめたということが分かる。ミヘルス自身の党幻想がしだいに払拭され

つつあったということなのであろうか。

3) この事実認識重視への傾斜は、しかし、まだ、民主主義思想の完全な放棄にはいたっていない。これが、党の現実的な、生体「解剖」のパスをなす。

この「政党組織の保守的性格」でミヘルスは、オリガーキーの極限形式として、「絶対君主制」を考えていることは、注目に値する。つまり、大衆社会、大衆組織におけるオリガーキーの発生という『政党の社会学』の発想とは異なるからであり、オリガーキー・イメージの過渡的段階のものといえよう。

それと対極にあるのが、人民主権の民主主義である。この国法上の議論に対して第二のテーマが論ぜられる。現実との接点である。つまり、階級対立のある資本主義体制では、「この理想的民主主義」は「不可能」というのが、基本的考えである。

この「理想」と「現実」との相克とダイナミズムがいっそう重要な問題となる。つまり、この体制を変革する「要素」、つまり社会主義者と党は、この「理想的民主主義」を目指しているか否か、そして、それを、この体制に「注ぎ込む」ことができるかどうか、という問いである。

「政党組織の保守的性格」論文の後半はそれこそ主著の骨子をなす部分だが、ここでは、一般的地平での抽象的議論が興味深い。

社会主義政党は体制を民主化できるかという先の問題には端的に、否定的な解答がくだされる。そして、政党組織とは直接関係しない、分析がなされる。(後に、これも『政党の社会学』に組み込まれる)

つまり、思想史的、心理学的と、官僚制の3つの視点から、アプローチされるのである。

1) そもそもルソー流の「理想的デモクラシー」には、当然ながら、学問的懐疑が伴っていたという回顧がなされる。ここでの議論では、ミヘルスは、モスカのテーゼを補強する意図を表明している。

まず、「保守的傾向」を代表する知識人としてモスカを紹介するので

が、ここから、「政治階級」論がミヘルスにとってどういう意味をもったのか、が推測される。

つまり、彼が今までイタリア社会主義の特徴としてきた側面、そしてその側面に共感を隠してこなかったところのイタリア社会主義の特徴である「倫理的」側面に対する、またそのような自己の社会主義観に対する、痛烈な一撃となったのである。「民主主義の時代には倫理は誰の役にもたつ武器である。今日、誰もが、＜人民＞の名で語り、戦う。」あらゆる運動と組織の必需品というわけである。これは、しかし、先の保守主義者からは、これにより「全体の福祉を自分の福祉のために利用しようとする」、「自己欺瞞」であり、したがって「蟹気楼」であると、指弾される。

「明々白々な事実の世界では、全体の救済のために企てられた、あらゆる階級運動には、抜きがたいアンティノミーという刻印が押されている。人類は＜政治階級＞を免れることはできない」からである。

モスカのミヘルスへの影響については疑い得ない。もっとも、その内容については細かく分析する必要がある。

ところで、先にも触れたように今まではモスカのミヘルスへの影響のみに触れてきたが、逆に、ミヘルスがモスカへ影響したことは、いままであまり気づかれてこなかった。まずモスカの理論の思想史的先駆者を数多くあげたことを繰り返しておこう。しかも、社会主義者の中にそれを見出したこと。(ミヘルス一流の逆説的方法)

そこには、サン・シモン、フーリエ、そしてアナーキストのプルードン、バクーニンと勢ぞろいであらう。

しかし、ちょっと考えてみれば、それはミヘルスが言うような「興味深い事実」でもなんでもないことがすぐ分かる。資本主義社会の階級支配では、政治的支配は当然のことだし、政治階級の想定内に属する。

問題はそれを、よしとするのか、望ましいと考えるのか（貴族主義）、または不可避の普遍の法則とするのか（「変革不可能」、保守主義）の問

題である。ミヘルスはこれに答えず、「事実の世界」に留まろうとする。

2) 思想史的考察から「デモクラシーの邪魔になる諸傾向」の心理学（ミヘルスのばあい、それは同時に社会学である）的分析へと移る。

ここでは、今までミヘルスがドイツの社会研究で得た、半封建的な社会の知見が政治階級論テーゼの補強に転用される。ドイツのブルジョアジーは、封建貴族に吸収される。つまり、エリートが「庶民階級から補充される」という、分析である。

政治的世襲原理に対応するのが、大衆の無関心と指導者願望であり、『政党の社会学』におけるおなじみの主張である。（大衆の無関心の問題についてはエリート論者は正面からは論じない。）大衆の政治的無関心とリーダー欲求（英雄崇拜とむすびつく）の叙述は、明白に、大衆社会の大衆心理学研究（ルボン）に依拠している。しかし、政党との関連では、このリーダー欲求と英雄崇拜は、「労働者階級政党の組織化された大衆運動では無際限となる」と、指摘されている。さらに、分業と教育格差も付け加わる、

3) 官僚制については、ミヘルス独自の視点加わる。

まず、官僚制については、ウェーバーとともに「市民社会内では合目的性の増大」、つまり、合理化とともに誕生し、増殖すると主張される。「政治階級の自己保存の手段としての国家官僚制」という言葉使いには、モスカの影響が感じられるが、中間階級と官僚制ポストに関する先の考察において、それがいっそうはっきりわかる。

そしてこの、一般的法則の証明のために、「反オリガーキー運動におけるオリガーキー傾向」が証拠として提出される。そして、社会主義運動の解剖についてはミヘルス自身、「偽善という道徳的非難」をなすのではないと断りつつ、「善悪の彼岸」にある「社会法則」の探求に動機があると断言する。しかしながらそれは必ずしも、大衆政党独自の分析と実質的にはつながらない。

最初に取り上げる、代表制の「蜃気楼効果」命題は、国制上の問題と

して語られているからである。「国民の利害の代表という理念は……妄想となる。」その根拠はこうである。

「自由な国民憲法」の存在しないドイツは言うまでもなく、一応、議会主義と国民の「自由と、真のリベラリズム」の存在するイタリアでさえ、腐敗選挙と選挙干渉、政敵排除は強烈である。議会の影響力は確かに大きい。しかしそれを「現実的な人民の支配の帰結」とみるのは、誤りだ、とミヘルスは言う。ジョリッティ体制が背後にあることは言うまでもなからう。

政党と国政のレベルの相違についてミヘルスはさほど自覚してはいなかったが、「ウィルヘルム2世とドイツ人民」(N. 216)論文は、数少ない例外で、そこで彼は党組織の特性は体制を反映している、と指摘している。

つまりSPDの矛盾(理論と実践、民主主義とオリガーキー)は、ドイツの体制の矛盾に対応しているというわけである。ミヘルスによると、ドイツには進歩した経済と半封建的な政治、国政との間に「深淵」が存在する。イタリアと比較すると、経済は「未来」に属し、政治は「過去」に属す。ドイツの議会制の未熟(特権も権能もない、擬似的国会)が、ミヘルスの議会制の理想視の背景にある。ドイツの民主化が青年ミヘルスの願望の中心にあったことは疑いない(半ば絶望しながら)。従って、こういうミヘルスにおいては、民主主義と社会主義との間に、強いつながりが存在したことが忘れられてはならない。社会主義の問題は民主主義の問題なのであり、逆もまた真である。

## お わ り に

最後に、以上の考察の範囲からもれた——けれども、重要でないというわけではない——テーマについて触れておこう。

ミヘルスの研究の特徴のひとつである、比較という方法について興味深い考察がみられる。「アルヒーフ」でミヘルスと共同の編集者であっ

たゾンバルトはミヘルスにとって、イタリア・プロレタリア研究の先達であった。短いゾンバルト論（N. 208）でミヘルスは彼を賞賛しながら、肯定的に紹介している。そしてその方法意識の特徴をこう述べる。大方の研究が、資本主義がもっとも進化したイギリスに向かうのに、ゾンバルトは、イタリアのプロレタリアートを選んだ。それは、ミヘルスによると、ゾンバルトが進化の法則に基づいた「比較研究」にはさほど価値がないと、考えたからである。

というのも、ゾンバルトは単純な、俗流唯物論を拒否しているからである。経済発展の法則性に、政治の相対的に自立した発展が対応する。

「政治科学の本質は、各国独特の歴史から生じた個性と唯一性にある特性を反映させる具体的な関係の質的秩序を確定することに存するからだ。」

他方で、ゾンバルトは、マルクス主義者といいうる、とも述べる。その理由として、

①階級闘争を歴史の法則と認める、

②社会主義の必然性を承認する、

この二点を挙げる。

ゾンバルトは、いわば、社会主義と「マルクス経済学」をきりはなす。マルクスが「人間の心理的主意性」を排除しているからである。ミヘルスが、マルクス経済学と唯物論の教条化には一貫して反対していたことは既述したが、ゾンバルトの影響が考えられる。理論は新しい事実の発見によって絶えず修正されねばならない。

ドイツとイタリアの比較はミヘルスならではの研究であった。政治的、経済的、社会的分析の比較研究として、N. 197 論文は、「イタリア発展の人口統計的研究」を目指したものだが、人口問題は後のミヘルスによるイタリア研究（つまり、イタリア帝国主義の第一要因）として中心の問題をなす。

ミヘルスはここで、イタリアのパトリオティズムへの肩入れを示す。

同時に、イタリア（人）に関する固定観念と偏見（例えば、犯罪、性道徳、衛生状況）の打破を自分の使命としていることが伺える。そして何よりも、この間のミヘルスにとってイタリアの近代化が重要問題だったが、その阻害要因を二つ挙げる。

- 1) 文盲率が5割という教育のおくれ（これも改善しつつある）、
- 2) 石炭不足、がそれである。

ここで、イタリア人女性の社会的地位が比較的高いとされる。この周知のミヘルス命題がここでは男性移民の増加と関係づけられる。その結果、女性労働者の数が増加し、彼女らの「文化的進歩」に寄与し、イタリアの社会主義発展の一因となったというわけである。

イタリア人女性に関する研究はまだ緒に就いたばかりであった。イタリア人女性のおかれた状況を英語で紹介した、妻ジゼラとの共著論文（N. 206）もそういう動機に基づいて書かれた。イタリア人女性については外国ではほとんど知られていない、からと。彼女らの置かれた矛盾した状況が剔抉される。大学では、女性の地位（学生、教授）が非常に高いのだが、婚姻では最低の水準である。姦通罪は残っているが離婚法は存在しない。でも、イタリア人女性労働者の活発な戦いが希望の星というわけである。

実証主義的な学問への傾斜はこの時期の特徴だが、マルクス主義と社会主義に関しては、「ユートピア」に対する「学問的な懐疑」に「学問」の使命を見出す一方、一切の固定観念とイデオロギーにたいして事実認識を対置するという方法意識が強くなったことは、先のイタリアに関する指摘でも分かる。

Turiell の書籍への書評で（イタリア人）大衆の受動性に一定の理解を示しながら、実証主義的に批判的に修正を加える。そして大衆が、「個人（たとえばピスマルク）の盲目的に従順な道具でしかない」とする単純な意見には同意しかねる、と告白している。エリート論者とは一線を画した歴史観である。現代の民主主義の時代は、一握りの英雄の気

まぐれの歴史ではない。もっとも、一方で、現代では政治的、行政的、経済的権力が集中の可能性は否定できない、と見ている。

イタリアにおける民主主義勢力は、決して強力ではないが、まだ、ミヘルスは希望を捨ててはいないようである。その証拠として、アヴィシニア政策が中途半端の結果に終わった理由として、ミヘルスは「イタリアの純粋に防衛的な愛国主義の伝統が純粋に保たれており、政府の一切の攻略政策に手ごわく抵抗する、イタリア人民の民主的で倫理的な諸傾向」をあげているからである。

最後に、Marie Braun の書籍への書評でミヘルスは、機械的な唯物論理解を再び実証主義的に批判している。近代資本主義の発展は必ずしも、女性労働者に階級意識を生み出さない。むしろ、前近代的な「道徳的・上部構造」が存続しているからである。

翻って思うに、ミヘルスの問題意識は、この逆説がなぜ生じるのか、それは、マルクス主義にとって何を意味するのか、また社会主義と民主主義にとって何を意味するのか、にあったといえる。

## 注

- (1) Pino Ferraris, *Saggi su Roberto Michels*, Pubblicazioni della Facoltà di Giurisprudenza dell'Università di Camerino, 1993. p. 182.  
なお、ミヘルスの著作からの引用は、本文や注でことわらない限り、“Opere di Roberto Michels” in *Studi in Memoria di Roberto Michels*. Annali della Facoltà di Giurisprudenza, vol. XLIX-1937-Seie V-vol/XV, R. Università degli Studi di Perugia. p. 39-76 にあるミヘルスの文献目録の番号で本文中に略記する。1908年分は本稿末尾に掲載してある。
- (2) Lawrence A. Scaff, *Max Weber and Robert Michels*, AJS Volume 86 Number 6. Wolfgang J. Mommsen, *Max Weber and Roberto Michels. An Asymmetrical Partnership*, AES 22 (1981) p. 100-116.
- (3) Ettore A. Albertoni, *Gaetano Mosca-storia di una dottrina politica*, 1978, p. 36, 52, 54.
- (4) D. Beetham, *From Socialism to Fascism-The Relation between Theory and Practice in the Work of Robert Michels*, Political Studies, Nr. 25, 1977, p. 3-24 and p. 161-181.

- (5) 氏家伸一「ミヘルス『政党の社会学』」佐々木毅編『政治学の名著』中公新書, 1989.
- (6) Ferraris, p. 176.
- (7) *Roberto Michels-socialismo e fascismo (1925-1934-in appendice: lettere di G. Sorel a R. Michels)* a cura di Enrico De Mas, 1991. p. 140-141.  
1906年4月の日記, 「G.ソレルは, 大人物だ。ちょっと, 歳をとった, 時代遅れだが, ひどくブルジョア的だ。革命的というより, 文士の気質の人だ。……破壊的の相貌がしない。」  
「ユダヤ人をひどく警戒し, 理想主義も根本的に信用していない。」ジャコバンやジョレスのように……。  
ちなみに, 1913年の日記には「ソレルは変わった。王党派に近づいている。「忌まわしき民主主義への共通の憎悪」がなによりの理由」と書かれていた。
- (8) Ferraris, p. 183.
- (9) *Il principio aristocratico e il democratico*, Gaetano Mosca, *Partiti e Sindacati nella crisi del regime parlamentare*, 1975.
- (10) Ferraris, p. 176.
- (11) Michels, *Il Proletariato e la borghesia nel Movimento Socialista Italiano*, 1908, 1975. p. 379.
- (12) *Der Homo Oeconomicus und die Kooperation*, «Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik», Band XXIX, Heft I, S. 50-83.  
*L'uomo economico e la cooperazione*. 《Riforma Sociale》, 1909.
- (13) Ferraris, p. 185.
- (14) Eduardo Bernstein, *Die Demokratie in der Sozialdemokratie*, «Sozialistische Monatshefte», 25. Hefte, S. 1106-1114.
- (15) James H. Meisel, *The Myth of the Ruling Class*, 1958, p. 184, 185.
- (16) Cf. Seton-Watson, *Italy from Liberalism to Fascism*, 1981, p. 91-97.
- (17) *Der Konservative Grundzug der Partei-Organization*. 《Monatsschrift für Soziologie》, I. Jahrgang, 1909.

ミヘルス文献目録 (1908)

A. “Opere di Roberto Michels” in *Studi in Memoria di Roberto Michels*, Annali della Facolta di Giurisprudenza, vol. XLIX-1937-Seie V-vol/XV, R. Università degli Studi di Perugia. p. 39-76 より, 1908年分。

205. *Einige Randbemerkungen zum Problem der Demokratie*. «Sozialistische

- Monatshefte», 25. Hefte, pagg. 1615-1621.
206. *Concerning the Italian women*. «Wilshire's Magazine». September. P. 12.
207. *La Vraie patrie*. «Le Progres» Revue scientifique et litteraire. Ie annee, N. 2, p. 5.
208. *Economisti tedeschi*. Werner Sombart. «Nuova Antologia». Estratto, 8 p.
209. *Le patriotisme des socialistes allemands et le conger d'Essen*. «Le Mouvement Socialiste», Xe annee, troisieme serie, t. II, p. 5-13.
210. *Die oligarchischen Tendenzen der Gesellschaft. Ein Beitrag zum Problem der Demokratie*. «Archiv fur Sozialwissenschaft und Sozialpolitik», Bd. XXVII, H. 1, S. 73-135.
211. *Le cote ethique du socialime positiviste*. «La Societe Nouvelle», revue internationale, 14e annee, 2e serie, N. 3, p. 305-312.
212. *Appunti sulla situazione presente del socialismo italiano*. «Il Divenire Sociale», anno IV, N. 18, p. 294-296
213. *Le memorie di Herzen e l'Itaia*. «Nuova Antologia». Estratto, 15p..
214. *La formazione dei centri d'affari meno abitati nelle citta moderne della Germania*. «Riforma Sociale», vol. XIX, anno XV, fasc. 5, Estratto 11p..
215. *L'oligarchia organica costituzionale. Nuovi studi sulla classe politica*, «Riforma Sociale», vol. XVII, anno XIV, fasc. 12, Estratto 25p..
216. *Guglielmo II e il popolo Tedesco*. «Rivista Popolare», anno XIV, N. 24, p. 659-662.
217. *Die Entwicklung der Theorieen im modernen Sozialismus Italiens*. Introduzione alla traduzione Tedesco dell' opuscolo di Enrico Ferri, *Die revolutionare Methode*. Lipsia 1908. Hirshfled, p. 7-35.

B, 上記 A に記載漏れの文献。

1. *Le Syndicalisme et le Socialisme en Allemagne*. «Syndicalisme et Socialisme» Biblioththeque du Mouvement Socialiste, Avan-propos, par Hubert Lagardelle, Paris, 1908.

書評

- «Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik», II serie, XV, 1908, S. 526-545.  
——— Kritische Literatur-Uebersichten. Italienische Sozialstatistische und Sozialpolitische Literatur von Robert Michels
- E. Nathan, “Vent' Anni di Vita Italiana attrverso all' Annuario”, 1906.  
“L'Itaia Economica, Annuario della Attivita Nazionale”, 1907.
- Guido Sensini, “La Variazione delle Stato Economico d'Italia nell'ultimo

trentennio del secolo XIX”, 1904.

Pietro Orsi, “L’Italia Moderna, Storia degli ultimi 150 Anni”

L. Einaudi, “Un Principe Mercante; Studi sull’Espansione Coloniale Italiana”,  
1900.

Alessandro Schiavi, “Come nasce, vive muore la povera gente”.

Luigi Rava, “La Cassa Nazionale di Previdenza per l’Invalidita e la Vecchiaia degli  
Operai in relazione alle Legislazioni esteri”.

Pasquale Turiello, “Il Secolo XIX”, 1902.

《Riforma sociale》, Anno XV, Vol XIX

Marie Braun: Drei Klassen in Industrie und Handel der Stadt Karlsruhe, 1907.

Beinhold Heynen: Zur Entstehung des Kapitalismus in Venedig.

Hermann A. L. Degener: Wer ist? 1908.